有島灌漑溝の百年を考える(その2) 有島灌漑溝を歩く

秋も深まった 2023 年 10 月 29 日 (日)、土香る会の運営委員有志 5 名は、有島灌漑溝の下見会を行いました。

この目的は、有島感慨溝の歴史的資源性について多くの人に知っていただくため、機会を見て広く 呼びかけて探索会を開催することを目指し、そのために運営委員会内部で現地の状況を確認する下 見調査を行おう、ということになったものです。

運営委員会内部でもまだ現地見学をしたことがないメンバーもいたことから、この日は2時間以内で可能な範囲まで足を伸ばしてみることにしました。

事前に有島灌漑溝視察の許可をいただくため有島謝恩会の飯塚健造会長にご挨拶に伺ったところ、「今年は例年になく雑草の繁茂が激しく、5月の泥揚げと6月の草刈り以降数ヶ月で既に簡単には足を踏み入れられない状況になっているので、状況のひどいところは諦めて比較的入りやすいところに限定した方が良いのではないか」とアドバイスをいただきました。また、「もちろん全コース約4キロを通して歩くすることも、この時期では無理でしょう。全コースを歩きたいのであれば、来年以降、謝恩会が6月に行う草刈りの直後なら一般の方も歩けるので、その時にどうですか」とのご提案もいただきました。

そこで、飯塚さんのアドバイスに従って、足を踏み入れやすい5ブロックに限定して下見踏査コースを設定しました。また、5ブロックを途中車で繋いで各所ごとに車とのアクセスを容易にする必要もありましたので、次のような下見コースを設定しました。当日の実際の状況について、報告します。

1 灌漑溝水源地(起点)周辺

車置き場から灌漑溝水源地までのコースは、草の繁茂がかなりひどいですが、歩けないことはないので、車を亀田満吉さん宅地先付近に停めて水源地まで歩いて往復しました。

このルートのみで石垣の水路が見られます。地形が比較的平坦なので斜段は設置されていませんが、水源地水門に大きな溜池があります。このため池の造成が、有島灌漑溝事件の発端となり国家権力による弾圧の口実となった歴史的事件をもたらしました。この有島灌漑溝事件の概要については、既に11月9日の本WEB記事にてご紹介してありますので、ご覧ください。

(https://tsuchikaoru-kai.org/wp-content/uploads/2023/11/a181328a45590261f61d6b138ab9cdf5.pdf) 往復歩きの移動に若干の現地説明入れて往復 40 分ほどの予定でしたが、実際には 50 分程度かかりました。

なお、このコースに特徴的な石組みについて9年ほど前に独自に調べたことがあるので、その折 の記事も、参考までに合わせて掲載します。

「有島灌漑溝の「石組み」を再調査しようと思い立ち、2014年9月20日、取水口および斜断を中心に現地を訪れた。歴史的産業遺産としての視点から有島灌漑溝に関心を持ち始めたヘリテージ・マネージャーの向田薫さんも同行してくれた。

有島灌漑溝の「石組み」については、先立って同年7月から8月にかけて行ったワークショップと現地探索ツアーにおいても、参加者から大きな関心が寄せられた。取水口から導かれる最初の二百メートル程の距離を、直線と緩いカーブの組合せで周囲の緑陰を映し込む灌漑溝は、全コース約4キロの中でも、ひときわ美しい景観をもたらしており、灌漑溝側面の石組みがその大きな要因をなしている。灌漑溝自体がこの石組みによって造形されているのは、この箇所だけである。他にも断片的に石組みで側面が補強されたような箇所はあるが、観るものが歓声を上げるほどの美しい景観を形作っているのは、ここだけである。

また、灌漑溝全コースの随所(10箇所以上)に設けられている「斜断」の多くにも、その側面には石組みが用いられており、灌漑溝全体の中で、石組みが何等かの重要な役割を担っていた事を偲ばせる。では、その役割とは何だったのか。

土木工学的な機能としての役割が主であったろう事は想像できるが、いわゆる「機能美」という 結果をもたらしている事も確かであるし、そのような意図的な狙いもあったのかもしれない。ワ ークショップの参加者が灌漑溝の価値に目覚めることのできた重要なアイコンのひとつが、この 石組みの機能美、造形美にあった事は、紛れもない総括ポイントであった。

そのようなきっかけから、「この石組みの石材は、どこから持って来たものだろうか。この石組みを施工した「石工職人」はどのような人たちであったか。」という疑問が、大きな命題となっているのである。

今回の調査は、「石組みの実相」を現場に赴いて撮影し、基本資料を作成する事にあった。現場調査に同行してくださったヘリテージ・マネージャーの向田薫さんからは、ニセコ駅前中央倉庫群保存活用プロジェクトをコーディネートしている古建築の専門家としての知見から、いくつかの有益なご指摘も頂いた。日本古来の石組み技術の類型から、有島灌漑溝の石組みがどのタイプに属するものなのか、また、その類型であったとして、灌漑溝の現場からどのような特徴と個性を見出す事ができそうか。加えて、その背景にはどのような意図と事情が考えられるか、等々。それらの観点から、有意義なヒントをお聞きする事ができた。さらに、そのヒントをもとに「石組みの謎」を解明するため、今後どのような専門家ネットワークと連携できそうか。現場での会話は次第に深まりと広がりを見せ、今後の調査の深化に大きな手掛かりを得ることができた」



2 親子の坂周辺

車置き場から上流部へ草の繁茂状況がひどくなる地点手前まで行って折り返し、観察しました。このブロックでは、最も身近に斜段を観察することができ、また、少し上流部に遡った地点で、本来の石組み斜段と並んで、その後修復のため完全コンクリートによる斜段とされたものも並置されていることから、石組み斜段の特徴を比較検討できるポイントにもなっています。歩きの移動に若干の現地説明入れて往復25分。

3 生活の家周辺

車置き場から上流部へ草の繁茂状況がひどくない部分を多少歩いて、生活の家が立地する前の 灌漑溝の状況を確認しました。大きな斜段が下流方面に1箇所ありますが、今回はそこまで行き ませんでした。

歩きの移動に若干の現地説明入れて往復15分。





4 市街地住宅地周辺

市街地住宅が建て込んでいる裏手を流れる有 島灌漑溝の存在とその意味は、おそらく周辺住 民も知らないようです。

車置き場からの観察にとどめ、上下流への移動はしないで5分。

5 ニセコ小学校裏(終点)周辺

有島灌漑溝の最終ポイントは、ニセコ小学校体育館裏手の側溝に流れ込むところです。灌漑溝は、この最後の地点で一際素晴らしい輝きを放っていました。それまで住宅地の裏手を流れ込んできた灌漑溝は、小さな自然河川のような細やかな姿を呈し、その最終地点から可憐な自然の滝のような景観を伴って、探索を続けてきた私たちの目を楽しませてくれました。

車置き場からの観察にとどめて15分。





以上の所要時間 50+25+15+5+15=1 時間 50 分。 各地間の車による移動所要時間を含めると、約 2時間になりました。

※参加者:春日井、桜井、高木、藤波、梅田 (文責:梅田)